

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25284177

研究課題名(和文)近代都市形成における多文化混住状況と出身地域社会への影響に関する研究

研究課題名(英文)A Study on multi-cultural situation in the modern city and the influence for their home country

研究代表者

岡田 浩樹 (OKADA, Hiroki)

神戸大学・国際文化学研究科・教授

研究者番号：90299058

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「多文化共生」イデオロギーが流布する前の日本の近代都市の「多文化状況」を個別の地域社会の社会史を集約的な共同調査によって明らかにすることを目的とする。地域社会、マイノリティのネットワーク、マイノリティ間の関係、母社会との相互関係に注目し、日本社会の多文化化の実証的モデルを検討した。具体的な研究対象は、多文化共生イデオロギーの発祥地とも言える神戸・阪神間地域であり、南西諸島、コリアン移住者と地域社会の関係、移住者と出身社会との関係について、これまで二者間関係的にとらえられてきた移住者の生活世界が、中間移住地を含めた重層的な「移動空間」から成立していることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the "multicultural situation" of the modern city in Japan before "multicultural symbiosis" ideology circulates, and the social history of the individual community through intensive joint research. While paying attention to the fact that the migration is a modernistic phenomenon, we focus on a minority's network, the relation between minorities, and correlation with mother society and examine the process of multi- "culturization" in Japanese society. We conducted the demonstrative research on Kobe city and the area between Hanshin where is the birthplace of multicultural symbiosis ideology. We focus on the relation between Amami's, the Okinawa's migrant and a Korean local society and community, and the relation between a migrant and mother society and clear the importance of transit domain or sphere for migration and transit center town.

研究分野：文化人類学

キーワード：移住労働 多文化 南西諸島 在日コリアン 近代都市 ネットワーク マイノリティ

1. 研究開始当初の背景

研究開始当時、日本社会の多文化化が注目を集め、人類学、社会学等、様々な分野で「多文化共生」に関連する研究が行われていた。本研究課題では、研究開始当初は「多文化共生研究」の問題点の再検討を行うことから着手した。

「多文化共生」は研究上の議論の対象と言うだけでなく、各自治体の政策の重要課題となりつつあり、政策研究の対象としても注目を集めていた。加えて NGO や NPO などの市民団体が多文化共生のスローガンの元で活発に活動をおこなうなど、社会運動、市民運動に関する実践的な研究も現れていた。

一方で「多文化共生」の定義自体は曖昧なままであり、その内実が不明瞭なまま置かれていた。これが実践される社会的文化的コンテキストは地域社会に依存(岡田 2007)していた。あるべき日本社会のありようとして語られる「多文化共生」はある種のクリーシェ(常套句)あるいはイデオロギーとして作用し、実証的な研究を踏まえた上での理論的研究が不足していた。

個別の外国人マイノリティについての調査研究が進む一方で、特に彼らが生活を展開する地域社会との関係については、十分に実証的な研究がなされているとは言いがたい状況があった。この理由は多くの研究調査は日本の多文化現象が顕在化する 1990 年代以後の短いスパンを対象としていたためであったが、日本の地域社会の有り様は、近代の歴史的過程の延長上にあり、歴史的な背景をともなった社会関係や社会関係が厚く集積している。

この状況を踏まえた比較的長期の歴史的パースペクティブからの日本社会、地域社会の多文化に関する研究の必要性があり、従来の研究において、このような地域社会の個別の歴史的、社会的・文脈が十分考慮していない問題点があった。

近代以降の地域社会形成過程と日本社会の多文化の過程の関係については、社会学における谷や西村、奥田らの研究、歴史学において大阪の近現代史を取り扱った杉原ら(1986)の研究など少数に留まっている。

また現在の「多文化共生」以後の状況と、それ以前の地域社会の歴史的過程を連続させて検討した研究の蓄積はない。ある種地域社会の歴史が「多文化共生」以前と以後に切断され、以前の歴史的背景が空白のまま、現在の多文化化、「多文化共生」に注目が集まっていると言える。

加えて、それまでの研究には、マイノリティである外国人に注目が集まる一方で、地域住民さらには日本人というマジョリティは、しばしば本質化され、標準化され、記述される問題があった。研究代表者は、科学研究費補助金の助成による地方在住の在日コリアンのネットワークの調査研究などの在日コリアンに関する調査研究をおこなってきた。

加えて 2005 年以降、兵庫県の在日外国人に関する委託調査、外国人諸団体との地域貢献活動などを通して地域社会の多文化化の問題に関心を持つようになり、神戸大学異文化研究交流センター研究助成などによる、「多文化共生」に関する調査、神戸定住外国人センターとの共同調査、などを実施してきた(岡田 2007)。

神戸および阪神間地域は在日外国人が多く居住し、1995 年の阪神淡路大震災後の復興過程では「多文化共生」というスローガンが社会全体に流布する契機をもたらした。その後も多文化共生政策の先進地域の一つであり、NGO、NPO などが活発に活動している。

この神戸を初めとした「多文化共生」に着目したケーススタディは対象とする地域社会に視野が限定されがちであり、マイノリティの生活世界を多面的に理解し、地域社会との関係を明らかにするためには、出身社会との間に築いたネットワーク、そしてその影響

なども視野に収めねばならない。

しかしマイノリティの出身社会とのネットワークや出身地域への影響については、李仁子、長坂、石井などすでに多くの調査研究がおこなわれているものの、そうしたネットワークと移住先の地域社会との関連、マイノリティのネットワーク間の関係は十分に検討されているとは言えない状況であった。

多文化共生に関しては、竹沢(2009)が企画した文化人類学における特集、あるいは内藤(2012)の「排除と包摂」の特集など、その現状と課題を指摘する研究も見いだされる

ただし、これを実践のレベルの議論だけでなく、実証的な調査から理論的な検討に至るまでの集約的な調査研究は未だおこなわれていないのが現状である。本研究課題は、このような在日コリアンや神戸を中心とする地域社会に関する調査研究を踏まえ、本研究課題の調査研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「多文化共生」イデオロギーが流布する前の日本の近代都市の「多文化状況」と、その受け皿となった個別の地域社会の社会史を集約的な共同調査によって明らかにすることである。近代的現象である移住に見いだされる地域社会、マイノリティのネットワーク、マイノリティ間の関係、母社会との相互関係に注目し、日本社会の多文化化の実証的モデルを検討する。

具体的な研究対象は、多文化共生イデオロギーの発祥地とも言える神戸・阪神間地域である。奄美・沖縄系移住者・コリアン系移住者、と地域社会の関係、移住者と出身社会との関係に焦点を当てる。この研究を通じて、日本社会の多文化化に関する実証的研究を深化させ、日本的多文化主義「多文化共生」について批判的な再検討をおこない、多文化主義の人類学的研究に理論的な貢献を目指した。

3. 研究の方法

本研究の調査研究プロセスは4段階に分けて行われた。

すなわち、研究期間内においては、神戸市長田区を中心に、阪神間の地域社会について、戦前の多文化混在状況の社会史を文献資料および聞き取り調査によって示す。

- 1、奄美・沖縄出身者の生活史および現在まで継続する同郷集団とネットワーク、出身地への影響を明らかにした。特に徳之島、沖永良部出身者の同郷ネットワークに注目すべきデータを得ることができた。

- 2、韓国慶尚南道および済州島出身者の生活史および出身地との関係、影響を明らかにした。

- 1、 から得られたデータにより、エスニックグループ間関係の社会史を明らかにする、

- 2、80年代以降に移動してきたインドシナ難民、特にベトナム系について、文献研究および研究協力者のサポートを受けつつ、その定住化の過程と地域社会、他のエスニックグループとの関係を明らかにした。

阪神淡路大震災以降の「多文化共生」の過程で、地域社会がどのように再編成され、諸関係・集団がどのように変容したか検討し、さらに理論的検討を行った。

4. 研究成果

本研究の研究成果としては、日本の地域社会の多文化化のプロセスを、神戸、阪神間地域社会という特定の地域社会についての集約的・多面的な調査によって、さらには文献資料を併用することで、比較的長い時間的スパンで把握し、日本社会の近代化、都市化のプロセスの中で位置づけたことである。

このような多文化化の過程で地域社会の

中で位置づけられたマイノリティの相互関係、そしてマイノリティの出身社会への影響を、相互作用を伴う動態的な歴史のプロセスとして捉え、移民移住者が出身地だけでなく、出身社会と移住先の都市の間に複数の中間居住地を形成していることが明らかになった。

この事は、これまで2点間の移動としてとらえられがちであり、移動は点（出身地域社会）と点（移住先地域社会）を結ぶ線（移動経路）で把握してきた従来の研究とは異なり、ある種の「移動領域」の存在と、その領域のあり方が移住者の移住先における状況や出身地域社会に移住者が与える影響、出身地域社会の変化において重要であることが明らかになった。

よって、本研究は研究調査の進展に従って、出身地域社会、移住先地域社会の変化のプロセスだけでなく、この「移動領域」の歴史のプロセスの実証的調査にも焦点を当てた。その結果、共時的な状況のみに着目し、そこでの静態的な二者間関係に着目しがちな従来の「多文化共生」の観点から行われる研究を批判し得た。

すなわち、「多文化共生」研究は、現在の状況に焦点を当てる傾向があり、その基盤となる地域社会の個別性を看過する傾向があった。本研究は地域社会の個別性に目を向けた上で、日本社会の多文化化の過程の一般モデルを構築し得るようなアプローチを見いだした。

一般モデルに至るには、現在の調査研究を深化させるとともに、神戸阪神間以外の地域社会の事例との比較研究が必要となるため、現段階では「移動領域」のモデルは仮説にとどまるという課題は残されている。ただし、本研究で得た成果はマイノリティ研究に留まらず、日本社会の近代化、グローバル化の過程に対する新たな知見を加える可能性があり、「多文化共生」の批判的再検討および多文化主義への理論的貢献という意義がある。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- ・岡田浩樹「マイノリティとしての朝鮮半島系住民 朝鮮人から在日コリアンへ」『国際文化学』40:1-24,2013
- ・高正子「解放直後・在日済州島出身者の社会調査」『大阪産業大学論集 人文社会科学編』18:139-157,159-175,2013
- ・高正子「在日コリアン1世・2世女性のライフヒストリーに見る時間表現の談話機能-文化談話分析から」『多文化関係学』12:21-37,2015
- ・島村恭則「民俗学の研究動向と方言研究との接点」『方言の研究』26:151-163,2016
- ・島村恭則、『『民俗学』是什麼』『文化遺産』46:59-65,2017
- ・飯田卓 戦後期南西諸島における爆薬漁-八重山諸島の事例『島嶼研究』18-14,2017

〔学会発表〕(計5件)

- ・島村恭則「フォークロア (folkloristics) とはなにか」『日本民俗学会』,2013年10月14日,新潟大学(新潟市)
- ・島村恭則「宮古島フォークロア研究の新しい視点」『宮古島の神と森を考える』(招待講演)2013年11月24日,宮古市(沖縄)
- ・政岡伸洋「在日朝鮮系住民の定住プロセスと地域連携からみえてくるもの」,『神戸大学異文化研究交流センター・神戸定住外国人支援センター共同プロジェクト(長田研究会)』,2014年9月8日,神戸定住外国人支援センター(神戸市)
- ・OKADA Hiroki Folklore(Ethnology) on Conflict between localized multi-culturalism and counter-nationalism in Japan, in international symposium: *Perspectives and Positions of Cultural and Folklore Studies*

in Japan and Germany, 2016年10月28日,
München (Germany)

・ SHIMAMURA Takanori , What is
“Minzokugaku”? : An Introduction to
Japanese Folkloristics. in
international symposium: *Perspectives and
Positions of Cultural and Folklore Studies
in Japan and Germany*, 2016年10月28日,
München (Germany)

〔図書〕(計5件)

・ 岡田浩樹 『公共人類学』, 山下晋司編 全
242頁中15頁(39-54頁) 「多文化共生」,
東京大学出版会, 2014。

・ 岡田浩樹 『地域と理論から見るアジア共同
体』, 坂井一成編(全238頁中14頁(59-72
頁)) 「朝鮮半島から見るアジア共同体」, 芦
書房, 2015

・ 岡田浩樹 『複言語・複文化時代の日本語教
育』, 本田弘之・松田真希子編 全272頁中
22頁(113-134頁) 「誰が『母語』を必要と
するのか - 日本社会のマイノリティにとっ
ての「日本語」の政治的意味 - 」凡人社, 2016

・ 島村恭則編著 『引揚者の戦後』新曜社、全
398頁, 2013。

・ 島村恭則 「フォークロア研究とライフス
トーリー」 『語りが拓く地平 ライフストー
リーの展開』山田富秋・好井裕明編、せり
か書房、pp.78 - 98, 2013

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田浩樹 (OKADA Hiroki)

神戸大学・大学院国際文化学研究所・教授
研究者番号：90299058

(2) 研究分担者

政岡伸洋 (MASAOKA Nobuhiro)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：60352085

飯田卓 (IIDA Taku)

国立民族学博物館・先端人類科学研究部・准
教授

研究者番号：30332191

島村恭則 (SHIMAMURA Takanori)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：10311136

高正子 (KO Jyeon-Ja)

神戸大学・国際文化学部・講師

研究者番号：80444141

(3) 連携研究者

()

研究者番号：